



せせらぎ

卒業式特集

令和7年3月26日

清瀬市立清瀬第四小学校



希望を胸に春休み 「学び直し」をじっくりとー

校長 長沼 正城

一昨日の修了式、一人一人思い思いに、春休みに入りました。修了式では、6年生が在校生に向けて、有終の美を飾りました。詩の群読を披露してくれたのです。2編の詩。どちらも心に沁みる内容です。

『生きる』(谷川俊太郎)。何気ない日常生活、身の回りのたくさんの素晴らしいものやことが謳うたわれています。

「すべての美しいものに出あうこと」「かくされた悪を注意深くこばむこと」との言葉は、この詩の要旨です。我が人生を「生きる」中で敏感にならなければならない、「美しさと醜みにくさ」(美醜感覚)、「正しいことと間違ったこと」(正誤感覚)を常に磨きたいものだ！ということが伝わってきます。

『雨にも負けず』(宮沢賢治)。体調を何度も崩してしまった賢治。「死と背中合わせ」を意識しながら生きた賢治。その詩には賢治の理想とする生き方が書き綴られています。

一つ一つの言葉を何度も何度も音読し、暗唱してきた6年生。自信をもってその素敵な声を響かせてくれました。この3月に、1・2・3年生の人たちが校長室に来てくれました。その中でも感動したことがあります。ある3年生児童が、「校長先生、九九をやりに来ました。」と。

その児童は、2年生のときに合格しそこなっていたのです。それが本人の中で課題として残っていたのでしょう。3年生になって何度か練習してきました。でもなかなか合格できずにいました。それでも諦めないで、練習してきたのでした。

「よく来てくれました。では、自信をもってやってみてね。」

と励まして、じっと耳を傾けました。2の段から9の段まで、一気にやり抜きました。ほとんどつかえずにでき、見事に目標タイムをクリアして、合格したのでした。

ふだんおとなしいその児童は、ニコリと笑顔になって、「合格証」をゲットしました。素直な心でチャレンジし、粘り強くやり抜いた結果に、また一つ「自信」をつけました。

また、ある3名の児童が、「3年生のうちに、すごいね、と言ってもらえる俳句を作りたい！」と気合いの笑顔でやってきました。その場で何度も書き直し、さらに持ち帰って、また次の日に言葉を選び吟味して修正してきました。そこにも粘り強さが光っていました。その俳句を修了式で紹介しました。ここでは2つだけ紹介します。

「うぐいすの 鳴き声ひびき 花見ごろ」

「真っ赤な陽 (ひ) すずめの元気 とんでいく」

修了式では、そのようながんばった姿を紹介しつつ、「春休みに2つがんばろう」と呼びかけました。

一つは、『ドリルパーク』にチャレンジしよう。

二つは、「目と目でパチッとあいさつに、チャレンジしよう。」

ドリルパークの内容はとても充実しているので、自学自習に最適です。チャレンジした結果、ポイントもたまっていきます。(ポイントほしさに同じ問題を何度もやることは、時間の無駄になります。そういう人はないとは思いますが…)とにかく、「学び直し」が大切です。自分がわからなところまで戻って、チャレンジさせてください。

「目と目であいさつ」は、全校的にその姿がたくさん見られるようになりました。その姿をカウントしてみると、西階段下では86人。事務室前では89人。それぞれ新記録でした。担任以外の先生(図工・音楽・事務員・用務員等)が、“あいさつポイント”に立ってくれて、そこを通過するたびに、「目と目」を合わせてあいさつしていきます。

「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」は、相手の存在を大切にする行為となり、コミュニケーションの土台となります。この姿も大切に、進級・進学に向けて「希望の春」を楽しんでくれたらと願っています。



令和6年度卒業式

～写真で見る卒業式特集～



卒業式 校長式辞（一部省略）

さて、卒業生の皆さん、本日は、晴れの門出に際して、「くちびるに歌をもて」というイギリスの話を通して、皆さんと対話するような気持ちで、一緒に想像しながら考えながら進めたいと思います。そしてその中から、はなむけの言葉を贈りたいと思います。

日本から遠く離れている国、イギリス。そのイギリスの近くで海で大事故が起きました。深い霧が立ち込めていたその海を、一艘の船が運航中でした。突然、ドーンと大型船と衝突してしまいました。その船は沈没してしまったのです。

皆さん、想像してみてください。真っ暗な夜で、さらに霧がかかっているのです。その中に突然、放り出されてしまったのです。もしも皆さんがそんな目にあったらどうしますか。

そのとき、暗い波の間に浮かんでいる一人の男がいました。男は、溺れないように、足と腕を動かし続けました。時々流れてくる木にもつかまりました。しかし疲れはたまる一方でした。もう長くは泳いでいられない気がしてきました。いつになったら助けがきてくれるのだろう…と、不安は募り、気持ちは落ち込んでいきます。「もうだめだ…」とあきらめの心は「絶望」で一杯になりました。

とその時、遠くの方からかすかに歌声が聞こえてきました。

じっと耳を澄ますときれいな歌声です。

その天使のような歌声に元気をもらい、男はその歌の方へと泳いでいきました。

何人かの婦人が大きな材木につかまっているのが見えました。

歌を歌っていたのは、その中の一人のお嬢さんだったのです。

男は、なんとかそこに近づくことができました。そしてここまで泳げたことにお礼を言いました。

しかし、もともとそこにいたご婦人方は、口々に「いつになったら救いがくるのかしら！」と不満をもらしていました。

そのような中であっても、そのお嬢さんは、不平不満を言わずに、また歌を歌い続けるのでした。

男は冷静になって考え、ご婦人方に提案しました。「みんなで歌える歌を一緒に歌いませんか」と。

すると、ご婦人たちは顔を見合わせ、声を合わせ、心を合わせて合唱に参加していったのでした。

何曲か歌っているうちに、歌うのを止めてしまう人が出てきました。

しかし、お嬢さんは合唱の中心になって、その美しい歌声を震わせながら続けました。

しばらくすると、遠くの方で何か音がしました。

「ボートだ。救助のボートが来てくれた。」

やがてそこにいた全員が引き上げられました。

男は、ほっと安堵の息をしました。そしてお嬢さんに向かって、

「お嬢さん、あなたの歌が、私たちを救ってくれたのです。」

ありがとうございました。本当にありがとうございました。」

と心からのお礼を言いました。

さて、今の話には三者三様の生き方がありました。男の人、ご婦人方、お嬢さん。みなさんはどの生き方に心を動かされましたか。

まずは「男の人」。「感謝」と「知恵」の行動が見えました。次に、「ご婦人方」。だんだんとみんなと一緒に歌おうという「素直な心」が見えました。そして「お嬢さん」。このお嬢さんは、きっと皆さんと同じくらいの歳かもしれません。その「生き方」をもう少し想像しながら掘り下げたいと思います。

そのお嬢さんは、今まさに、油断すると海におぼれてしまう絶対絶命のピンチにありました。そのお嬢さんにとっては、「歌を歌うこと」は、きっと「自分の中で一番」だったに違いありません。それをいざというときに「勇気」を出して発揮しました。その歌声はみんなを元気づけ、それが「励まし」となりました。みんなは、一人の少女の勇気の行動によって、元気をもらい、生きる希望を見出しました。その始まりはお嬢さんの「勇気の一歩」に違いないと思いました。

以上のように、私なりに少し想像をふくらませてみました。

みなさんは、どのように感じましたか。この6年間の小学校生活、特に最高学年でのこの1年間。さまざまなところで活躍する姿は、この「勇気」を出したからではないでしょうか。初めはちょっと重荷だったにこにこ班の班長の役割、その責任を果たしたのも「勇気」。運動会では先生の踊りの指導に必死にくらいついていったのも「勇気」、展覧会でアートナビゲーターをやるのも「勇気」でした。これから皆さんは、中学生になっても高校生になっても、自分らしく、自分の良さを発揮してほしいと願っています。そのためにも、「ちょっと大変だな」「自分には無理かな」「少し恥ずかしいな」という弱い心を吹き飛ばして、誰の心にもある、この「勇気」を発揮していくことを願っています。そしてあのお嬢さんのように「自分の中の一番」をつくってほしいと思います。

それでは、最後に私からははなむけの言葉として、一首 短歌を贈って、式辞といたします。

「くじけずに またくじけずにわが道を 勇気の一歩で 新たな自分を」